

若き日の桜沢如一氏（新しき世界へ 1972 年 4 月号）

石河 俊

竹之内診佐夫先生

先日は全く偶然なことで先生にお目に掛り、故桜沢如一氏の、私がお別れしてから、かれこれ 50 年近い年月の御動静の一端を知りまして、ただただ感無量で御座いました。同じ東京の屋根の下に住んでおりながら、なんで御存命中にお訪ねしなかったか、お訪ね出来なかったかを、先生のお家を出てからずっと考えつづけました。第一に氏の膝下を逃げだした私が突然氏の前に現れるのは、いささか気の重い事があったのです。それは氏の許を逃げだした私の無分別が因となって、巴里に留学していた兄の帰国、兄と氏との袂別まで引起し、いつまでも胸につかえる思い出があったからです。

第二には、氏の許を逃げ出して大陸に渡った私が、ついに何一つの有意義な事もなし得ず、凡々の入生を過ぎた事に対する私のいささかの恥らいもあったようです。また、東京でひたすら貿易の仕事に没頭していた私は貿易界とあまり係わりの無い最近のお仕事について(私の知っている当時の氏は貿易屋でしたが)、その後の御活躍の伏況を知る機がなかったのです。その上、常用しておられた「オーサワ」のお名前は私には全く意外な未知のものでした。私の知っているのは、どこまでも「サクラザワ・ジョイチ」であり、そのほかの呼び名は、たとえ新聞雑誌で見ても、漢字でない限り気がつかないと思います。こうした事で、私は氏が東京に居られるという事を想像しながら、探してお訪ねする事もせず、ついに永久にその機を逸してしまったのが今となっては残念です。

ところで先生にお約束しましたので桜沢如一氏と私の出会い、若き日の氏の思い出を書いて見ようと思いますが、考えて見ると今は世界的な哲学者、崇高な人格者として内外の多くの人々の尊敬を一身にあつめて居られる氏の若き日の動向を知ることが、それ等の人々にとって無意味の事のようにも思えますし、私の拙い文が氏の人格を傷つけるような事があってはと心配も致します。ただ、私自身は当時の氏の日常生活のひとつひとつに、その後の大成の基礎があった事を思い合わせて感銘を深くしていますけれど。

とにかく、先生の許をお訪ねして桜沢如一氏の近影に接し、数々の出版物を拝見した時の私の驚きは大きいものでした。

この一文は、その驚きが引出した桜沢如一氏についての私の思い出です。若き日の桜沢氏にこんな事もあったのだと知っていただき、あとは破ってお捨て下さって結構です。

輸出部長時代

さて、私は、桜沢如一氏の 27 才から 35 才まで、氏の仕事の面でいうなら、神戸の熊沢商店の輸出部長から、後に日本デブリ社を設立して独立されるまで、お住居でいえば、神戸市葺合小川谷の山の中腹にあった「扇の要家」時代から阪神岩屋停留所の上の二階建に

住まれるまで、前後十年足らずの間、全く肉親の弟に対する愛情と厳しさを以て導き訓えられました。初対面の瞬間からどうして私に対して特別な扱いをされたのか、それについては、当時、氏が出版された令弟の遺稿集「あねもね」を読んで知ったのですが、氏の唯一人の令弟が家を飛び出して上京し生活苦、病苦に敗れて客死された直後であって、その精神的な痛恨が私に反映したのだったと思います。戴いた遺稿集の「あねもね」の花の表紙と扉のハンチング姿の令弟の自画像が目に残っています。

桜沢如一氏と私の最初の出会いは、私が愛媛県松山市の高等小学校を卒業して、熊沢商店神戸支店の小売員募集広告に応募した時で、その当時輸出部長だった氏が私を面接しました。大正7年、私が15才、氏が27才だったと思います。

氏は私に、「自分も武士(さむらい)の子だし、君も武士の子だ、人に負けないよう頑張らねばならぬ」と強く云われた。当時の履歴書は名前の前に必ず、何々県士族とか、平民とか書いてあったので、それを見て云われたのです。

熊沢商店というのは横浜山下町に本店があり、神戸、ペルーのリマ、バンコックに支店を置いて羽二重と雑貨の輸出に重点を置いた、ごく小さい会社でした。

今はあの辺り昔の面影はありませんが、ちょうど元町駅になっている辺りに当時の三宮駅があって、駅のガードをくぐって元町の方へ下る穴門筋というのがありました。その中程にある黒い日本建築の二階家が熊沢商店で、支店長が桜井栄次郎、輸出部長の桜沢如一氏を筆頭に、岩井俊介、戒野太郎、石橋良次郎、高橋光次郎、木下楠太郎その他10人ばかりの小ぢンマリした会社でした。

社長が横浜の熊沢甚太郎、リマの支店長が樋口、バンコックが福島氏で、樋口氏は結婚のため帰国をされた事があり、福島氏はチブスに侵されて異郷で亡くなられる不幸もありました。

着々と飛躍の準備

桜沢氏の二回目か三回目の渡航手続きの際、履歴書を書いて驚いたのですが、京都一商を卒業してこの熊沢商店に到着くまで、氏は神戸、三宮界限の三流どころの小さい貿易商を転々と渡り歩き、長くて1、2年、短いのは2、3カ月、約6年間に5、6カ所会社を変って居られるのです。結果から見て、それは貿易実務、商品知識、海外得意先の確保や研究、会社経営等について短期間に最も確実に学び取る最も適切な手段になったと思います。あるいは氏の明断な頭脳と高邁な精神は容易に他と融和したとは考えられず相容れぬ喧嘩別れもあった事でしょう。

その日その日の出来事に一喜一憂して頭を占拠され、仕事と遊び、精神的あるいは肉体的『病魔』に悩まされ煩悩の虜(とりこ)になって一日一日を徒費しがちな私の何よりの驚きは、桜沢如一氏が自分の身の辺のそうした慌しさにもかかわらず、その6、7年の間に貿易業務にたずさわって職責を立派に果しながら、数力国の語学をマスターし文学、哲学、医学、易学、天文学の奥義を究め、食養法をひろめ、日本式ローマ字の普及に尽し、和歌、版画

の道に入り文字通り万卷の書を読破して着々将来飛躍の基礎を培って居られたという事です。

それであるのに、当時起居を共にした私の記憶に浮ぶのは、事務机に向って、輸出羽二重の見本の上に小さい拡大レンズを置いてメッシュの数読みをして微動もせぬ氏の姿。布引から元町へ運ぶ通勤電車で釣革にぶら下って本を立読みして居られる姿。あるいは夜更けの事務所で楽譜を前に一人マンドリンを弾いて居られる姿、そうした勉強以外の事だけであるのが不思議でなりません。深い思索や長い思考の上になり立つそれらの学問を、氏は、何時、どこで、どんな風に勉強せられたのでしょうか、果して当時充分の睡眠を取って居られたのでしょうか。

愛唱の歌を

時には社員を店の二階に集めて茶話会が開かれました。甘いものではそれだけが許されていた元町の高砂屋の金つばを食べながら氏も愛唱の歌をうたわれました。

「恋のために身は捕はれわが魂の頼りなさを彼の手を取るのは何時の日、何時の日いつ迄我が身は悲しむ鳥はうち群れて鳴けどもわが身は一人しなげく一」

何の歌劇の歌でしょうか、50年後の今も私の耳に残るなつかしいメロディです。

氏が石塚式食養法を始められたのは、ひどい胸の病気をされてからと聞いて居ますが、私がお会いする数年前だったのだらうと思います。

この当時はすでに朝の味噌汁は八丁味噌で、白餅を入れましたし、昼の仕出し弁当にしても食養法的に一応吟味されたものでした。

半揚米にタツブリゴマ塩をかけた御飯、梅干、醤油番茶、ゴマ油、香気のある石鹼、思いつくとなつかしいものばかりです。

外部の方々とは、時折り集会があったようで、店に食養品の在庫があつて会員の方々にお届けしたりしましたので、氏が食養会の支部を引受けて居られたのかと思います。もちろん貿易が正業でした。

私の仕事は、朝、店の内外の掃除。ヒルは山手 YMCA の前の税関へ輸出の申告。銀行、郵便局への走り使い、倉庫との連絡、それから食養会の届け物、夜は英語の勉強に夜学に通いました。米騒動で鈴木商店の本店や工場が焼打ちされるのを、北長狭小学校の校庭から見たのもその頃、大正7年、夏の夜でした。大正8年の2月、氏は私を商業学校に入れることにして葺合、小川谷の山の家へ引取り、そこで受験勉強をさせました。

この山荘は、電車を布引何丁目かで降りて、谷川に沿った山道を約1キロも登った山の中腹にあり、裏には透き通った氷のように冷たい水が流れるせせらぎがあつて朝々ここで顔を洗いました。前は崖、前方の山と山の間から扇形に見える神戸の港の遠望は素敵でした。氏はこの山荘に「扇の要家」と命名し、ここから会社へ通つて居られました。50才ぐらいの婆やが居て、会社とここを行ったり来たりして身のむ世話をしていましたが、男でも女でも一人で居るには淋し過ぎる一軒家でした。

その当時、氏は友人と共同で「オイル・シルク」の加工販売を計画し、これは失敗のようでした。羽二重生地に油加工をしたレインコート地で恐らくフランス土産の技術でしょうが、油の質が悪いのか日本の湿度が高すぎるのか乾燥が不完全で、出来そこなった反物がゴロゴロしていました。もっとも実験の域を出ぬ小規模なものだったようです。

すでに 28 才、結婚適齢期の誠に頭の鋭い前途洋々たる青年、桜沢如一氏にすっかり魅せられた桜井支店長は、自分の義妹を氏にめあわせようと家族総ぐるみで一生懸命働きかけたが、これはいつこうに成功しそうにないのが私の子供心にも面白くうつりました。

ほんとうのところは、氏は私を岡崎の実家へ預けて、自分の出身校である京一商へ通わせたかったようですが、入試に自信のない私は郷里・愛媛県に帰って商業学校に入り、そして、氏の目が届かぬままに野球選手として 5 年の学生生活を遊んでしまいました。多少勉強が気になって、田舎の学校の事ですから学業成績は上位にありましたが、いざ卒業の段になって神戸高商に入れと云われたのには参りました。

関西学院、高等商業学部に入學出来たのが私にはヤットの事でした。大正 12 年の関東大震災は氏の生涯に大きい転機をもたらしたと思います。

熊沢商店の横浜本社が地震で壊滅して、首脳陣が神戸に移りました。当時神戸支店長であった氏は、輸出部長をしていた私の兄を含めて部下三人と共に独立し、仏蘭西・デブリ社の代理店として「日本デブリ社」を設立し、事務所を海岸通りの商船ビルに置いて、高速度撮影機の販売を始めました。

1 台の価格 3 万円、1 台で 1 万円の利益という事を聞いたように思います。ちょうど日本では礦石ラジオがようやく普及し始めたところで、「スローモーション・ピクチャー」の機械は珍しいものでした。

私の兄は、私が熊沢商店をやめて商業学校に入る時、桜沢氏にすすめられて大阪の造船所をやめて入社し、氏が支店長時代、輸出部長を引継ぎ、氏と一緒に前記日本デブリ社創立に参加したのですが、この頃会社に籍を置いたまま農商務省の海外留学生として巴里に渡り、氏と同じようにソルボンヌ大学に通っていました。関西学院に入った私は、氏の新居である灘の岩屋の御宅へ引き取られました。御結婚二年目、御長男が生れて間の無い頃です。

歎異妙、万葉、食養

朝 5 時きっかりに氏も奥様も二階の書斎に入られ、私も私の部屋で、それぞれ勉強が始まります。私は昼は学校、夜は仏蘭西語の夜学に通いました。その間、氏は私に歎異紗を説き、万葉を読み、食養法を実践させ、今思えば涙の出るような有難い導きを施されたのですが、田舎で、なまぐらな生活を送って来た私には、その一分のすきもない生活が徐々に堪え難きものになって来たようです。

あるいは一応官立学校の型にはまった教育を期待していた私に、関西学院の自由な、むしろ放縦な授業様式が大きい失望を与えていた心のいらだちもあったでしょう。

あるいはまた、この時になって、私の悪い癖、あの神戸の山手から港を見下ろし、白いボートを沢山両舷に抱いた外国航路の巨船の群に海外への憧れを夢見る私の感傷癖が私の心をズルズルと引きずり込んでしまったのかも知れません。ある日の午後、私は糸の切れた凧のように、突然氏の許を離れ、神戸から兵庫、塩屋、須磨と西へ西へと歩き始めていました。

須磨に住む関学の友人、三浦に旅費を借り、舞子の浜の松並木を通り抜け、夜明けに明石にたどり着き、淡路島を縦断、鳴戸海峡を渡り一旦帰郷してそのまま私は日本を後にしたのです。今はその時の発作的な行動の動機も、当時の私の心境も思い出せませんが、私の無分別な行動は氏の心をどんなに傷つけた事でしょうか。申訳の無い事をしたものです。

この頃まで氏の本業は貿易であり、食養法はサイドビジネスだったと思います。それから45年、私は私なりの人生を生き抜いて来ましたが、28才まではノンプロのようなチームで野球をやり人気を集めた事もありましたが、足を洗って結婚後はしごく真面目なサラリーマンとして家庭の平凡なよい夫でもありました。

桜沢氏のように、手掛けたものは何でも自分のものにしてしまう事は出来ませんが、日本では英語やフランス語を学び、朝鮮では朝鮮語、満洲では支那語やロシア語をかじる努力は致しました。

それぞれの国に親しい友人が出来て長い交際もしました。戦争で命拾いをし、日本に引揚げてからは外国商社の後援で貿易事業を起して一応の成功をし、たくさんの社員も動かしました。妻と一緒に日本国内もヨーロッパのほとんどの国も見て廻りました。私の人生はこれでよかったのだと思って居ります。

桜沢如一氏と私との縁は、あの日を境に切れてしまいました。氏の期待や厚意を裏切ったまま許される事もなく違った世界に生きて来た訳です。

しかしながら、私にとって人生の最も感受性の強い少年時代、しかも最も大切な人生の出発点で、氏のような偉大な人に出会い、親しく導きを受けた事は幸福だったと思いません。

短い月日ではありましたが、氏の日夜の教訓は私の内部に浸透し、潜在して私の一生を支配し通したのかも知れない。正義を貫く心。周囲の人々への、思いやり。絶えることなき向上心。純情、詩(うた)ごころ。私がいつまでも持ちつづけたいと希うそれらの『心』はすべて氏から貰ったもののような気がするからです。幽明境を異にした桜沢如一氏に、私は今心からのお詫びを申し上げ、御冥福を祈ってペンをおきます。

(46.10.15)